

科学哲学科学史特殊講義（京都大学）

補足5：追加資料

鈴木貴之

（東京大学大学院総合文化研究科）

tkykszk@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

デカルト 『方法序説』

「われわれの身体に似ていて、實際上可能なかぎりわれわれの行動を真似る機械があるとしても、だからといってそれが本当の人間ではない、と見分けるきわめて確実な二つの手段が、やはりわれわれにはあるだろう。 その第一は、これらの機械が、われわれが自分の思考を他人に表明するためにするように、言葉を使うことも、ほかの記号を組み合わせることも、けっしてできないだろうということだ。 …

第二は、このような機械が多くのことをわれわれのだれとも同じように、あるいはおそらくだれよりもうまくやれるとしても、あるほかの点でどうしてもなしえないことがあり、それによって、機械は認識することによって動くのではなく、ただその諸器官の配置によって動くだけであることがわかることである。…生のありとあらゆる場合に応じて、理性がわれわれを動かすのと同じやり方で、一つの機械のなかに、諸器官が十分多様に具わってその機械を動かすということは、実際的には不可能なことになる。」（岩波文庫版、pp. 75-76）

Dreyfus and Dreyfus 1988

「このような状況判断の背後には、思考とパターン認識は二つの異なる領域であり、両者の内でより重要なのは思考の方であるという前提があった。…もし事柄をこのように見るとすれば、それは、人間の専門知識においてパターン認識が卓越した役割を果たしていることを無視していることになる。また、そうした見方は、日常の現実世界における思考においては常識理解が背景として前提とされることも無視している。そして、常識理解をこのように背景として考慮に入れるためには、おそらく、パターン認識が要求されるのである。」（邦訳、p. 34）

「むしろ、常識的背景は、技能、慣習、識別、等々の組み合わせであって、それらは、志向的な状態ではなく、したがってなおさらのこと、要素と規則によって説明され得るようないかなる表現的＝表象的内容をも持っていないのではないだろうか。」（邦訳、p.42）

「しかし、人間は通常、常識知識を全く使用しないかもしれないとすればどうだろう。ハイデガーとウィトゲンシュタインが指摘したように、常識の持つ理解とは結局のところ何に帰するかといえ、それは日常的にいかにするかを知ることであると言ってよいだろう。」（邦訳、pp. 47-48）